

店員のバウラレる姿や新聞記事は、一瞥も見
たことも読んでこともなかつた。

重なる俵みは、暴動一年後に、大一パチン
コ店への整頓となつて現われるのである。

冬——さらに伊勢湾台風

冬場の仕事のことを見ると、十二月でも
おおもぬ三十日まで働けたし、年が明け六日
頃からホッポツと出て、十日エビスが過ぎる
と頓調にあつた。しかしこの年末、年始の十
日間をしのげる者は、約三分の一しかいない
といわれた。普通の者は月間二十五、六日、
少ない者が二十日は、年間平均働きなから、
正月十日間を暮らせないとはいかに労働条
件が劣悪であつたかを証明する。

アニコにどうして養の神となつたものは、伊勢
湾台風であつた。

それまでは、五、六百円だつた賃金が、ウ
ナギ登りに上がり、三、四カ月後には二千元
を突破する。へき賃金の仕事は、町屋の修理
せる。

自主的、強制的な求人、就業、就職関係を
断ち、租の料力の誇示と、資金の拡大を図る
その中でも、古いアニコと顔見知りの手配師
は、一俵運の目につかないように、仕事に行つ
てくれといつてヒリする。ナレ合の肉なもの
があつたり、また求人条件が厳しく、アニコ
の手配ができにくい場合等は、求人の方手に
手配師が二、三百円の賃上げを要求すること
等があつた。

賃金が不足という現象と、急遽に増大する
アニコに対し、手配師の増員がなされた。こ
れら組員は、仕事の経験もなく、たゞ若さと
暴力に対して自信のある者ばかりであつた。
これら一群は、従来の不文律までふみにじ
り、ウソ八百の手紙を始める。初めは、本船
荷役で千二百円の仕事を町屋の染付片付け
で二千二百円といつてタマシたり、石屋の手

仕事が多かつた。仕事は、本船荷役(白川、
千円—千六百円)団地建設、地下鉄工事等
(千五百円—二千円)と重なり、最も忙し
い頃は、十一時頃でもまだ仕事があつた。

アニコの「パイ」も、チューから二級酒、
一級酒と変わり始め、酒屋以外なかつた立飲
み屋もぼつぼつでございました。飯屋は、飯、才力
と共に半減する。

手配師にも変動があつた。
組員は、暴力団員士の抗争で山田組に襲
われ、して事務所より追放されるということ
があつた。

一夜にして手配師の座は入れ代わり、中に
は昨日までアニコをしていれた者も含まれてい
た。これが、暴動で一躍有名になつた山田組
である。

山田組のウソ八百手配

山田組は、交通の要地である藤田入口、南
霞町駅付近からアニコを追払い、阪神線線路

元でも整地の仕事をといつてヒリするデタラメ
な手配をやりだした。被害にあつたアニコの
中から怨嗔の声が起こり、手配師の仕事は益
々嫌われ出すと、今度は恫喝したり、あるいは
は、いやがる者を無理に力づくで白タクに押
込む場面も度々見られた。

金のない者は弱い立場である。この機は手
配師の仕事に行かねばならん場合もある。金
のないのに、寝違さす等をおそくな、三時で
ある、候が手配師の仕事でヒドイ目にあつた
話を二つする。

喧嘩で二三百円の契約が

幾多の「HOOPER」

一つは、一、二枚の千ニコで受け文無しにな
つていたのに、不意にも寝違さし、目を醒し
たのは八時を過ぎていた。あわてて時せ標に
出るが、仕事はすでになくなつていて、人の
故もまばらである。今日はアスレかなと思つ
てける時、手配師が来た。

「千八百円でコンクリート打た、行く者ないかし」と叫んでいる。俺は、今日はこの仕事が一番楽かなと思ひながら、まず条件を聞いてみる。俺「何時頃までかかるのか」手配師「午前中の、おそくとも一時までにおわるかなコンクリート打ヤ」という話、気が動き半信半疑で手配師専用の白タクに乗る。周囲にいた者の中から俺に乗りて四人乗ってきたので発車して理想に向かう。着いたのは九時頃である。

我方の顔を見て、俺はしまったと舌打ちする。それは、飛方というのは元の手配師仲間合の相原であつたから。

仕事の持場につかされる。俺は三人（内、飯場の者一人含む）でカード押し（普通は五、六人）ハラス方二人（普通は六、七人）砂入れ方一人（普通三、四人）である。野理な人数で作業を進めるため、目のまわる忙しさである。俺のカード押しはそれでも煙草をすう事くらいはできたが、骨材（砂、ハラス）に

突了した後、片付け仕事をさせられ六時頃あがる。

金を貰う段に於て、驚いたことには一時間寝ましたら賃金は増えずに減つていた。千八百円の約束が千五百円ずつ減つて帰る。

帰る途中三人は酒屋に寄つてヤケ酒をあふる。「今日は食われたな。俺は体が持つかと思ひかけた。この恨みは一生忘れない」と等と、今日の苦しさと親方の要口で一しきり話の花が咲く。

黙い出せば、アクドイ仕方に腹が立つ。常態を無視し、働く者の体力を考えず、飯を三時間余も延ばしたと、大騒ぎ行動であると知つて居るため、正規の時に飯にせず、アングのトンコを封殺し、仕事の目録が書いてから、トンコした二人には一銭も払わずに済んだと笑つて居る。

ここではもはや、労働搾取等という生易しいものでなく、特に労働関係に名を借りた殺人的行為であつた。

まわつた三人は、上から口ぎにはく怒鳴られるので、煙草に火き付ける間もない状態だ。親方は昼になつても飯を食わせない。三時過ぎで八十%以上打つてからようやく飯にする。

骨材の者は、三人のうち二人飯も食わず、金を貰わず、文句をいわずトンコしようとする。俺はぞつと「後少しだから、しんぼうしたら」といふ。だが、彼等は「このまま仕事を続けたら殺される。朝から勝を伸ばすこともできなかつたし、指も麻痺して伸ばせない。市内から十五円で帰れる。先に帰るわな」といふ。彼等二人の目は涙できらりと光つていた。俺は、胸にこみあげてくる怒り——横暴な暴力に対する、暴力の抑圧に屈している自分に対する——万感の思いで、仲間の二人の去り行く姿をぞつと見送る。

三十分の休憩で作業を続行する。二人の欠けた持場は、ツキ役、夕タキ役の中より、砂二人、ハラス四人に増員して、五時少し前に

鬼の桐山組へ（本船）

モラーフは、本船荷役の人夫出し、桐山組でのごとである。

ある朝、おそく密場に行き、一渡り仕事を採したが、すでに丘の仕事はなく、手配師の連呼しているスクラップ（本船荷役）のことを問うてみる。

俺「ワンデー（八時間労働、夕方五時まで）で必ず帰してくれぬか」

手配師「間違ひなく帰す。俺はウソはいわん。ワンデーは千五百円、オールナイトは二千円じゃ。色物（銅、砲金、真鍮等、なかば公然と仕事の合い間に取つて帰つていた。僕はK（キロ）二百円、真鍮K（キロ）百円）はバクバク出るぞ」といふので車に乗る。

矛盾した賃金であつた。八時間で千五百円なら、二十四時間労働では、残業、深夜の割増賃金を含んで四千円を越すのに、夜間の十六時間の労働は、昼の八時間労働よりも賃金は

低いという、こんな矛盾した、または明らか
に矛盾に違反したことが、暴力と強制手段
によって維持され、アッコの本船荷役の通常
となっていた。

桐山組に着き、飯場の者に連れられて船の
ハッチに入る。

霞町から来た六人は、四つあるモッコの最
も条件の悪い順に三人ずつ二つのモッコに配
置され、飯場の者は条件の良いモッコに五人
ずつの配置である。

従って、俺達霞町のアッコは、休む間もな
く追われ通しであり、順番が上がっていくモ
ッコに一杯入ってない時は、上から「早く入
れよ」と怒鳴り、時にはスクラッスを投げつ
けて来る。

本船荷役のモッコ仕事は、従来からの慣習
として、必ず順番に上げ、絶対に文のモッコ
を上げることがはしなない。終端つたり、時には
ナクつてもやらす。

飯場の者達は、条件は良く、人数も倍近く

つて、金を貰いに来たといいいおわらないうち
に足増りつけて来たのは、粗長であつた。

「てめえ、よくもよくも今時分帰りやがっ
たな。ここをどこだと思つてけつかる。てめ
えのような奴にや、^{お金}金を払つてやるから受
取れ」と、日本刀を引き抜いて俺の目の前に
つけ、そこにいた飯場の者に「こいつは船か
らトンコしやがった太い奴だ。お前ら少し可
愛がつてやれ」と言う。言下に二人出てきて、
粗長にかつこいところを見せようと、無抵抗
に抗する俺をナクル。十二、三発いかれ、鼻
血を流し顔をほらして桐山組を出る。

油をどろどろになりバスにも乗せしてくれな
い作業着は捨て、風呂敷に包んでいた衣服に
着替えたが、手や顔の油の汚れは、水ではい
かに洗つても落ちない。やるせない無念さど、
文無しであるから、港警に事件を告げに行き、
警等に告げに行くのは感の骨頂だといふこと
で、あらためて痛切に知らされる。

いるので色物を取つたり休んだりしている。
乏しきを愁えず、等しからざるを愁う、と
いう諺の意味が、突然として体得できた。

夕方五時に飯巴から上がれという。俺達が
五時までの約束だから帰るといえば、桐山組
のデッキマンが「眠もいことをぬかす奴ほど
いつだ。目を醒ましてやる。前へ出る」と恫喝
し、「お前達は、朝まで帰れんことを良く覺
えておけ。いいか」とぬかし、「早く飯を食
つて食え。クズクズするな」と怒鳴つてくる。
俺はこんな仕事を一晩中やらされてはたま
らんと考えながらゆっくり歩いて行くと、他
のハッチの者が大勢帰り仕度でやつて来る、
俺はこの列に素早くもぐり込み、舟に乗るこ
とが出来た。

「おれも帰つたな」と殴られ……

致し場を上り、桐山組に金を取りに行く、
先に連絡があつて、俺の帰つたのを知つてい
たらしい。俺が聞いた船名とハッチ番号をい

文無しで歩いて帰る

係の係り公は、「三十分も過ぎているから
現行犯ではない」とか、事情を不真面目な態
度で聞いている係り公に、隣の係り公は「こ
んな汚れの話を聞いてどうするのだ、帰せし
め」といふ。係の係り公も調書も取らずに帰れと
言うので、俺は驚き出る。

事の理非がこれほど明白でも、貧しき者の
権利をふみつぶす係り公、資本階級の番犬以
外の何者でもない係り公の正体を切実に知る、
俺は文なし故、巻より歩いて帰路につく。
途中、新聞紙や白い紙を拾つて顔をふくも、
おなかばかり空いた。

その夜は、空き腹をかかえ、天王寺公園
の野球場の観客席になつていた所へ今は、動
物園の一部に変わつて行くと寝る。煙草は
シケモクをパチンコ店を拾い、ついでにマッ
チも持つてくる。夏場なので大勢が寝ている、
五十名ぐらいいたらろう。

星のまばらな夜空を、段られて暮らして暮らして、油の汚れの詰ちきらない顔で眺めていた。押えようとしても無念さ、情満がこみ上げて来る。色々な想いの末、貧しき者の救われる道は世の中の仕組みを変える以外にないという結論に達し、遠い話だなど思ったり、今俺にできることはなんだろうと思ったりしているうちに、いつしか眠っていた。

おれは貧乏な人間だ

伊勢湾台風は、瞬間的にアッコの資金、労働条件を一般サラリーマンのレベルに追いつかした。このことがアッコの心理に与え影響は非常に大きかった。

今までは、侮視されても差別されても、俺達日食しいのだから、金が無いのだからという諷刺があった。

それが、「いつまでも馬鹿にすんな。俺達だつてサラリーマンに負けないだけ欲しいでいるんだぜ」という言葉がまかれた。

爾来の方は内部に向けられた。

悲慘なアッコの生活は、不当、不法な差別や侮視を諷めて許し、権力と暴力団の力の前には屈服していたのであり、極貧の生活それ自体は、決して斗争への起爆とはならなかった。逆に、俺達もサラリーマンに負けないという自負と誇りを自覚した時に爆発したのだから、生活の貧困、不当な差別、不当な侮視は、原因とばつたが起爆の役割は果たさなかつたと思ふ。

はせ、たかだか五十名ほどの山田組に一人五人こえていたアッコが勝てなかつたのか？ その理由は、警察が法律違反も暴力もおかまいなしという資本家の番犬ぶりを見せたこと、手配師はヤクザなりに規律もあり結束していたこと、反面

このことは、長い間差別と抑圧の中を苦しんでいるアッコに生活に自信を持たし、他の者と対峙の立場に立ち上るとする意欲が湧き出てくる。一方、ホリ公、商店等の扱いは以前と少しも変わらない。この間の矛盾とアツレキは、大暴動に発展する一つの必然性を秘めていたように思える。

暴動の力は貧困自体より

自分の誇りを自覚するまで

昔から即ち死に間際の百姓一揆の話もあまり聞かれないのである。

悲慘な生活状態の時は、そこに見られたのは、仲間より小金や衣服を盗むコソ泥の横行とあり、あるいは生きんがための飯を求めてのモガキであり、仲間の離散であり、あるいはより弱い仲間に対する迫害の光景であった。そして最も弱い仲間は倒れて死んで行き、死体まで大学病院のテスト材料に利用されたのである。ここでは、弱肉強食であり、矛盾の

アッコの方は長い経験から暴力を恐れ心理的に負けていたこと、である。具体的に言えば、仲間の手をかけた手配師にこびせり、仕事に行くのを告げ口したりする卑劣な、利己的な者がいたということだ。連の幹部者は、自分達を守つていくためには団結して闘う以外にない。部落民、中間階級人民と連帯して闘う、と呼びかける人がいるが、いいことだとは思ふが、連の幹部者は一言して抑圧者ではなく被抑圧者だつたという「金の歴史」をみないその呼びかけは空虚だと思ふ。

おれは

長い文なので一番前と一番後の部分は要約、また文中「朋友会」は「明友会」の誤り、ハページ下七行目「身の回り品」の誤り、まことわつておく。



ジャーナル。この「霞町のアッコ」は次の「第一次暴動体験談」などとともに、力アッコの「資料・カーネーション」を占めるものであり、いわば前編なのだ。四ページ下の「資料・カーネーション」は「明友会」の誤り、ハページ下七行目に「身の回り品」の誤り、まことわつておく。

